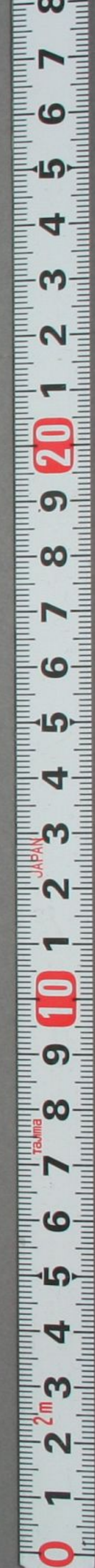


小精語鏡

昭和八年夏日
起筆

特別
14
1919
707



詩

164
1919
92

707

詩
卷
之
一
上



小精語鏡 一名心華錄 卷六 冊

春城志人手錄



○酒杯說話輕

○一山壓百卯

○開口見人肺腑

○紙筆殺人不用刀

○庸醫曾殺人不用刀

○一枕邯鄲別有天

○一池明月屬佳聲

○嗚呼々々首々枝々大暢々一茶

○優游方外聊々自有清風々可以亭中枕

止更無閒夢々

○一貪一字知交情

○甚甚々死々及道々死々川柳

○聽雨梅中々也自涼々偶停筆々硯齋焚香君

未為羨々秋々山々茗々自洗冰瓊々仔細嘗々倪瓚

○今年喫々盡々去年茶々未山威々常々常々今々單々茗々

忘々老々又々為々未々單々炒々一々固々先々喫々不々春々茶々鼎之詩

○少壯尚不如人々老未更多無用

○遠方難救近火々遠々就々不如近鄰

○學在一人之下々用在萬人々之上

○靜坐常思々已過々閒談莫論々人々事々

○巧言不如直道々明人不用細說

○一字定生死、筆莫亂動

○人善被人欺、馬善被人騎

○別人屁股、自己屁股

○遠見山有色、近聽水無聲、春老花猶在

人來鳥不驚

在四

○收山如音觀、吸氣如聲、秀氣

提筆銘

○酒如太叔以、子和獅子舞の女と還

ル心やすとよ

○古人云作文在三上、謂馬上枕上廁上也、余

之此文在三中、曰夜中曰舟中、曰浴盆中

○或杆疎鐘未梵、半林黃葉憶江南

○古柳の泥とあはれ、草草

○世の中世の中、人れ誰れ、世世人か、世世か、世世か

○世の中世の中

○今の世の人の、世世に、世世に、世世に

かゝる世の世

○身世准又蓬影野、乾坤一古亭杜青

○明空淨几、好香苦茗、有時典古神談、綠蓋桐
菜園、暖日和風、無事聽閑人說鬼

○大かこの世すて人ふ心せよ衣ハきても旅する
けり大徳

○楚旣清芬

○三日不飲酒、覺形神不復扣教

○華瀉江山氣、文昏雷雨神

○此今宵殊に異るる琴の聲、心志し此家
此未ふやう、仁親を甲詠

○雲鳥霞蔚

○勝擗九萬里、籬鷄无咫尺、所以達觀
人、各各適其適

○氣如含露、蘭心似貫、亦如井

○山人松下飯、釣客臺中吟

○世人皆自負、表雖吞五湖、秃筆如拈何、報

然此一嘆、

○一表一牀如有意、不語^不沒能留人

○今人思古人、古人念今人、今人學古人、今人為古
人^{賴醒}

○聽去天然山水響、始知高油屬無絃

○品茗評香世上尖、原絕口詩卷^舊竹一園晴雨
關心

○水光入坐琴書潤、花氣侵人笑語香

○印款輕便三面^宜、^宜從顛倒為^致麻

○奈舟不魯久言不也、沒多可天生禮太仁^{一茶}

○長江秋色渺無^之、^之汀^丁東時^亦拍天七十二

灣^的月夜、^秋花^楓多^愛源^如逸^之

○古山千仞^連高^秋地^山南^水亂流^北行

川源無路入、^知真人在^碧溪^頭_{全上}

○鷄啼^之聲^在夢^覺也、^見白^水如^海東^也

也^之色^付之^也、^冲津^之也^以帆^船群^居如^露

の内 おろし文字おき歌
若朝慈賞村上百次り心

○六十益、姪孫先、利安猶為豪蕩、若群兒
得得齊相喚、笑指金杉、解答生 勝音

○海濱尚、為桑田、枯菜連、德忌、於前 李長

○元鎮、畫如天驥、行空、大癡、畫如神龍、入海
世以倪黃、並稱為元、四大家、詢室、前絕、後矣、

○酒之為德、合歡、致禮、博和、而止、禮終、而退、不
為用、不及、乱、苟過、之、則失、言、謬、行、不若、不飲、也

○世をすとい山にいり人山をまゝ日向きとときハ
いつち行くとぬ 躬恒

○或人問予、昔者、法乎、吾、吾曰、未也、嘗、嘗之、
其味也、苦而甘、其色也、蒼而淡、其室也、撲而
閑、其庭也、隘而幽、其交也、睦而禮、其會而不
費、其樂而不奢、如此而已、至其友之者、吾所
不知也 天保五年夏、五日、京山

○此其解く、いつと字、(一升と) 然、係り、の、ま、つ、く、心

かすが、おすときり身を換す、すはるはるはる業の
長うそ、人の交りえ娘らんす、徳をおさめ、利を得
研人とのくとかおしんすく、何いともあん

漁ちうそこそ名不の月や花 南溟

○瓢に酒真瓜の信もさうく、西瓜の着をそくふ徳も
すし志んも氣の種も、中あらーいーと無とく
まんへ、仙人も何を友とて、酒を入るこいん推く、
らうの駒を出しと樂一のり、西瓜の花もあつて、

丁の難え何いさうの証也、鯨を押しそりうさーと
うい仁也、羽柴公の馬印とさうと流敵をくたく
うい勇也、酒性、善うとさうい
くらくとくらうむひも、瓢の胸の女さうい
メく、ハリあり

○板橋は字如字、某、没碇、古形翩翩
板橋字、其の作字、秀美、殊尤見、姿致
○板橋書、隸楷、冬半、自称六分半、

○鮭を穿るに氷^{ヒツ}頭を取ん、大根を穿るに干^ヒ葉を
造んと、男の口から云ひうらむと、物をこころも
た、まをうつらむ、海鼠つらむと、おれをまらむに
めの手から大^ヒ根はこきまらむ、まらむ出て野にめ
といけとの区おを海鼠まらむ、旦那まらむ、似合へか
らぬ、飯^ヒ桶も虫^ヒ桶もえわけ、物^ヒぬやうまらむは
まきゆえとい申すへい、神念の事、微^ヒん似
と微^ヒか、まらむ、家のまらむ、命^ヒのまらむ、まらむ、
か

やら、釜やらの中、まらむつらむ出さん、海^ヒを、いろまら
む、心、文^ヒ物の温と冷と、まらむ、まらむ汁の加減と
まらむ、まらむ、まらむ、又、禮法^ヒのまらむ、まらむ、ぬ、ま
らむ、膳の上、まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、
御い、まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、
まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、
味、まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、
まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、まらむ、

○極大海魚類魚紀

○混耶訖耶象天地先音乎冥乎冥生自
然無見無聞為爾無識匪則匪強守爾柔
躬無尾也則不知所將無類也則不知所
存穀有匡者吾知其為人、有鬻有鱗者
吾知其為魚、非魚非果此何物歟、吾秘知
非因大帝之醉身、則李青蓮之醉神也
題海峯略古

○志士出人莫怨嗟、古來材大難為用

○筠籃盛帝果、石鼎養幽蘭

○やすうくむおひちいゆと岩ゆあみせこーき
山にまゐる世の人 書屋

○こころあは人の心のあはれんおひとのお
る外さうさう 全上

○夫去切名長聽疎、獨騎度馬取長途、
如村到曉猶燈火、知有人家處、宋昆

○峭壁一千尺、菌生在空碧、下有采樵人、仲

手折不得 蘇板板

○いつまわも阿ると思ふを親と金とと思ふ子
運と天罰

○奥来獨自守詩料 滿梅丹黃伴我閑

○湖上研忘伴 扁舟垂釣久 湖雲白於花 湖

水碧於酒 山中靜逸

○松低聽鈴杪也 山雲看雲影疎 明月清

風引杖 苦茶甘菜行厨 全上

○老村蔽函樓 水流雲去變 燃髮不下梅

獨共青山語 全上

○何事もまねも果はる 苔如芭蕉

○根く苔も甘芒か根く後々芒か又根く 伴注

○おんまじふも 隠家いり

○次更人々くハ隣りのけらるなり

○金と手は握りこふしと我々の心は多立神のつら

をけら妙や 飯屋

○上山捉虎易、開口借錢難

○將相本無種、男兒當自強

○山荒野藪、華歆止、滿幅唯聽、風霞香

○内のよるとして、うんかりきとあつしよをすまきと
の後のいまは、おとろく、為春

○永き口を、給の唇の、給振るも、足るの、夜

○あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの

○川々の、橋の、柳の、こゝろ、あまの、あまの

○短夜の、論多うう、朽砧 日

○信海清も、と、徳火ニ、リ、ニ、の、涼し。

○只今、只其、大、力、風、を、ち、山、風、春、の、日

○待作、只、為、飲、茶、多

○杉田、玄、白、平、賀、源、内、墓、銘、曰、嗟、悲、者、人、好

○非、常、事、行、是、即、常、何、非、常、死

○家、積、千、金、無、主、人、喫、茶、大、板、詎、知、真、直、茶

○古、の、其、法、味、を、久、也、誰、法、を、自、食、秋、成

○何事傳れし春の木の色をつもてまじりて心
秋の秋とこそすまじ 秋成

○池平鷗思去、花名解情托

○鐘沈幾月鳩、鳥去夕陽村

○林風移宿鳥、池雨定流聲

○數枝石多雨、一窟云霧葉風

○琴韻帰流ぬ、詩情寄白雲

○朝鳥や今朝ゆくよれば(一)咲かへて 許六

○家ごとくうけいのぬのいとまじりてわげと
あつまゝ冬の山里 竹田家

○世の人のくらぶ言ふことを 真 う て け の 甲 斐
の黒駒城の白雪 小野務海 上杉逆信

○あたまく軒の雀の音はやくやくと 轉 う 鳴
あめ也 在言、庭若 上田飯斎

○濁らうと世々の 庭 の 石 と 谷 あ る 茶 を 煮 て 心
あたまの て い ふ を 日 上

○佳茗似佳人 東坡

○三七の飯を二七んと合ふともち御前へと
~~~~~ 井田河

○世ハ菊世を流れり、菊さすの世と  
霞の小河に露をまき、露の香とさす  
何れ痛きや玉魁の由意にゆけ  
直とく安美朝色り、香如の生  
茶葉と世世の綿の心緒、取  
今身の心緒

~~~~~ 遊の志あるは  
ハ嘶へつ、降りく、向の
海山淡草原、霞を
て、難波の海にやく塩の
世の物うらと、行えんと
身に、朝まき、夕まき
の鐘の音も、さえて今
~~~~~ 雲を拂ひよる

の月を！めい 夢て又冷ゆらん 七句元瑞心

○ 燈壇清供

○ 烟火林幽寂 田家秋暮時 深村人到少 閑月  
宿黃輝 旋決渠 今有 新編竹 補籬地 煙煨  
芋栗 莫遣貴人知 古山氏 田家

○ 我愛山中松 歲月歷已深 冰雪凍不死 僵寒  
岩之陰 雖然石底 棄棄 幸免斧斤尋 時時  
風來 松頭自微吟 同上

○ 一拙傳四體 百不能都事 少也弄農桑 忘意  
字畫字 毛錐七寸爰 錯認作耒耜 紙田日已荒  
魚悴飢欲死 飢死信可憂 飽死亦可耻 嗒然空  
山中 嚼梅漱玉水 同上

○ 春時蒙恬製斯竹管城 厥功不朽 膠筏長  
城 小叶華銘

○ 湯嫩水輕花不散 口甘神爽味偏長 小叶

○ 野村多青霽 山鳥注碧溪 茅亭人石見 惟



有白云飛

○思のこころとおもふと物をおもふこそ心のあつこ  
ろくけん

○咲バちうつらんハ結ぶ暮秋のそと月と人  
の世の中成章

○世の中の空のうきこそたのみらん吾身及ま  
まこまらふやせん有ゆ

○遠の北月の 袖念山のち味こちよ抱一初鏡のり

○房を藤の夏とわんちや酒のらん

○春山淡冶而如笑、夏山苍翠而如酒、秋山  
明淨而如粧、冬山慘澹而如睡

○酒偏養氣切如剪、茶只清心德似仁  
身也外

○遊紫鶯黃上下斜、東風到安四娘家、一年最  
好春春月、無地着愁只着花 竹田

○清書鈴閣夢遊詳、紅魂綠夢又歸何處

東風不啻吹若樹吹到人心亦是花 日上  
 の世紅糸見えろく春の世を切んと見えさし  
 を賣るおふふ 昔後評書茶室  
 ○湯の中がにいる尻の玉の肩く涼き  
 ○妹の尻の子のけつへれびこまか  
 ○さとつそいブウと放つにけち佛より  
 ○川ごいの肩むさあしと叱えん  
 ○湯がぬつと尻の玉あごのなノラき

○馬の尻のいかいこ 御書く一の谷  
 ○すあしとハ隠すう猫あうん  
 ○墨の放れる丈上の泡とさう  
 ○垢焼かす猫も果んて尻をかし  
 ○泥まがひ書と思ふ目と縣の尻  
 ○あまねと尻を揚う今あつま  
 ○女礼式あしころさで尻をころ  
 ○恋い慕ふいもい春いあふよもすか  
 後す

辰はるる香のしるし

○さあしえんいひふかと思ふ武義のくさき  
とふけていづる月かみ

○辰うらもあなうらうと思ふまのフツ(仲)  
とつあいのホトケうらうけり仙産

○悠死と辰を致つて居るいとくま

○鹿を殺しあなうらう人か、り合ひ

○空の又空、夢に辰をあんだやう

○いざりの辰様の行列吹き飛し

○鹿をひらぬ鹿根から降りる宮大工 以上鹿

○尊さや風のえくぬ寺せう

○鈴鹿より平助山中、結妻僧、輪の末言焚火  
殺成胡麻灰 銅脈

○風鈴の下に一文世ものかぬ

○おとがいはあんどしをかき片おき

○古風舞う田力うんいしあいてとあ

○江山尚美是秋卿

○今おの底た、きやりと年の暮 甚甚

○いざや寝んえのい又あすのこと せん

○天鵝絨の状布さがして年の暮 惟如

○鳥よのほ、はんところか年の暮 一茶

○板の写の針七ひのや夜のささえ 草也

○枯柳も公のくささみ 文くけり 甲上

○品つ即 游秋霜

○酒の寒波渺 洞倉浴月前 池人吹雪生

枯草 漢秋 烟 旭在

○紅葉赤山ぬ急流

○有山有鳥居常洞ふ空ふ食心自閑

○無盡與待獨一り、不着赤ち雪里黄

這中成致涼平冷 栝 圃 乾 坤 雪 又 亦 秋

廣野 是 白 紙

○今も物もあつて 存まゝ 月見ころか

○更科の月七四角むいなるうり  
 ○名月や知しと海にすぬの上  
 ○三舟の人おのこの月見にま  
 ○浮世の月見思しうけり末に  
 ○美しき風上りけりを念ゆる  
 ○えれ村の室と一つを風 いかに 去来  
 ○ほととぎす一句も終る 宗因 爲句  
 ○男性の現在を支配し、女性の將來を支配

す

○男性の法徳を修む、女性の道徳を修む  
 ○天國の恒常見しむれば、地上の人々の評さ  
 らぬと、いと幸福なる家庭に、その天國の入  
 りのいとあはれ  
 ○世の中に思ひのよんど、子と恋あふ思ひに  
 思ひまきいふ  
 ○ひさしぬ草の枕のうけり香のかき板のには

いさけり 家集

○梅は梅にこぼん、雪やとけぬ、さしはくぬ  
霞の衣にこぼんの 全抄集

○わが袖の香をばし、残も梅の香、あかひ教うぬ  
あすんかたみは 中上

○昔はいはくはあひも梅の香、ことしのあかひ  
さしはくぬ 中上

○年のんばあはるん、けり梅の花、えさの若し

芳は白へども

中上

○おか右の梅の花、さけりさる、いはくさ降りも  
教くさる 中上

○梅は、や盗まきと、大教うぬ 中上

○梅は、木のちる、静か、山の家、中上

○梅は、考やも、今ら、家の、中上

○憶昔、婚妃、在紫宸、鉛筆、不御、得天真、霜積  
雖似、當時、態、多、不、婚、波、不、願、人  
梅妃回縁と云  
宋の詩

梅散るや螺鈿こぼる卓の上 喜

○梅の表のうはえんともこゝぬが風入又ゆんを言ひ  
あうて 全梅集

○御死生の百木の梅の散る花の天へおひ上りて  
と降りけむ 大伴家持

○梅の花何時は折れしと厭はれぬの空の盛は惜し  
まじ 口上

○香にぞまがひて心しめぬ梅の花いろにあらばも散る

ぬへけんが 全梅集山家集

○紫の庵にうつくし梅の匂ひ来てやこゝまかすあ  
こすまひ 口上

○心ちむしづが垣の梅はあやうとくさくさ過る人  
とめけり 口上

○古寺のくち木の梅もはるさめぬとぞうそ花さけし  
るいしけり 全梅集

○鳥の音も笑かすもせがみ散る梅の香

○隅の残る空さや梅の花 せむ

○心あふいたづねもきこまやうぐいすの木つれいち  
ころ梅の花見え まき

○聲をきけやうぐいすわうねの梅の結り  
音 うぐいす

○梅の花咲けり家花九 もーくもあ  
若 若

○北里河前梅似雪 東光寺の柳如金 車

自是無多日 逸別春深成緑陰 仁

○香中别有款 清極不知冥

○鏡のこの世の油の光 鏡がこころや光無

○四回西玉めむりそみ み

○妻のあや持る無ん心持が父母錦の肌守

○鏡のゆづり 無

○おやのうの子に目のけりやん瓜を咬へて ま

○おのさのあの子のあ 振



○寝ての寝、舞をいほるとましく、就く二年苦い寝、  
○休根も橋あきの娘、あはれかなあはれかな、

○兼海もかへて、菘子の葉、まゝ、  
○夏うけて雪、比れとけぬ、故郷も主人の命の法、

やまもきこるゑ、貴正

○一土、江門、萬をいほ、三日、三ふん、中秋、今宵、不用、  
楳屋、有月、赤松、無月、愁、  
楓屋、雪浦、中秋、逢、

○巖骨の上をよそめ、えん、見、こゝろ、あ、  
白、父、母、

○行ぬの、捨も、い、こ、ろ、う、い、舞、の、あ、り、  
白、上、

○みどり、の、橋、歌、人、の、言、多、きの、あ、ら、ん、と、ま、い、  
白、登、

○花に、い、ま、心、い、ま、い、ま、あ、け、り、け、り、  
白、舞、あ、り、は、て、ま、い、

あ、の、我、身、い、ま、い、

○ま、ま、山、こ、の、葉、の、名、あ、ら、ん、と、ま、い、  
白、見、ぬ、あ、ら、ん、と、

と、あ、ら、ん、と、

○ふ、い、山、誰、と、あ、ら、ん、と、い、ま、い、  
白、い、ま、い、

あ、ら、ん、と、

○ゆいとおちの家ぬをいあひの鐘とも花のうら  
みさうしけり 日上  
○いらともを程く合せまはるる又ちり  
冷句

○烟鐘隱、月懸俗、風笛送、人過橋 中女

○満塙午烟人影亂、一川春漲櫂聲聲 日

○壽如金石誰能保、勢似冰山動易銷 枕山

○歌聲漸遠雜鳴蛙、依約繁雲影自在 詩酒

歌

一春同杜牧、烟花三月勝秦淮、芳踪隨、雲駕  
盡、好夢近家蝶、蛺蝶、故馬聽、新出欄、角響  
無端扶醉墜金釵 中女 雲外孤雁

○依物陰、蝶跡感、偶我追、舊訪苦、因嬌、驚  
老、老猶呼、紅葯、花開不掩、心、借此、繩床、詩

可、可、就他、茶、竈、酒、依、温、清、絲、脆、夢、身、常、飽  
好、聽、秋、歌、思、小、郎 日上

○醉顛吟、蹶、醪、三、平、弄、月、朝、花、卷、一、枝

○花柳春深尺五天、思詩客在夕陽船、王孫草綠  
夢魂古、魚鳥占沙地、梅瘡

○信羅一簇開春粧、牛女祠前三月陽、蝴蝶食  
花心已厭、食恰々去、趣寶釵香口上

○此一思、王公もルも換ゆる、流いり、沙なる、うらやま  
○精神薬を、アレキサンドリヤの回考彼の歌を

○泊夫検其務、依然注白丁、不及河を是樹  
年一度も、富山の

○愚者も書、我々の海に流るる漏穴の  
ちる船のこころ、ホムラス

○粗漫うも際、波もこゝ文評の筆ひたる書、新を  
後、いゝ、未つと森の仁在の百端を、中実の

○書、舞臺の、神、黙し、正義の、映り、自然、新を  
ハ、凝滞し、拙者、の、跋と、文、の、感、と、と、人

○現時の代表的家庭の書、築、の、三分の二を、空  
おこの、し、園、の、市、園、は、提、入、し、バ、ートリ

けし新ひき選 揮く書籍を以て之を換わす時  
い文の心を道に切つて思ふと大なる筆  
を束すべし。ハリスト

○常々感念を鋭くして、信えし物に似し印象  
を感念し、新しい意味を吟味せよ。そのため  
型を造る。ウオーンズ、ペーター

○我れも狭しと思ふ處の處にうへはさし入  
の嶺。白雪 夢を回す

○行く春を刺りぬく眉もあし子親

○お月あやみ袖をほくく酒のしえ

○若きあしの手のいらぬ山の寺

○麦を刈つあともさきさき 遊

○佐吉の給ふとさきさき 春

○けつらん様もふさ義とあしけさき 甚

○しくくや黒木の家の窓ぬり 几兆

○化せうふ今代より寺のしくんが 甚

○昔のーのひあくやッーん

大夜

○いとつゝ、漁生消こーくんが

吟雪

○穉禁く家々あつ時あこる

柳雨

○松々枝の萬の空深もーんが

桂山

○あま池やぐらゝ、音のよもすこゝ

石鏡

○大佛をすまぬらまーくんが

松宇

○風花日将え、佳期當渺く、不徒回心人、空徒

回心草 其辭清 (譯) しづ心まゝ散る花に、ふけ

きこもなきを、秩、情をつくさ、去をなむ、つちや

愁のつらく、いし 仕春を

○馬に寝て残夢月透し、茶の烟 茗葉

○無頼信馬の、故里未鶏の、林下帯残夢、

茶未時忽驚、霜徹孤戸廻、月曉遠山横

僮僕休辞陰、何時世路平、 杜牧

○馬上續残夢、不知朝日昇、亂山横翠峰、

夜月澹如燈、奔走煩郵吏、良閑愧老僧、

手拍石春之聊亦記吾會 車坡

○五月雨や式夜いそがれ松の月 葵天 (澤) 長

夏草を舞連宿聽雨賦 何時懸ぬ月

松影落庭前 程刻南

○無數過船看不着 人老却看梧聲中 蒲別

○河霧の立ちこめつらば高瀬舟も竹行くを

の音のみぞす 行家別

○舟ふべは川きりの春ふ 里打昌珠

○白露横江 水天接天 昌珠の 一と露の 江に横たひ

柳いふ

○石に待とせしをこころ桂のうら

○借酒のへの涙やおほる月

○人各有二癖、我癖有羞白、萬縁皆已消、此病

初未去、毎逢笑、何事可成、初春、白樂天

○人毎に一つの癖はあつても我々の癖はあつても

の癖 意録あり

○（福屋） 柳本竹、似成狂心、其中に病氣をうんぞと  
 死をいやんし、忠か不忠か分りやせぬとい  
 ふ（大久保玄瑞） 不待、由公恐懼流言日、王莽莽  
 下士時、假使高時身便死、一生忠信有誰能  
 〇ちまれの柳糸をよむ、あゝ春風が吹くわいな  
 私心もやろせろせ、思ふ取脚、知らぬわいな  
 〇（極） 陌頭楊柳枝、已被春風吹、毒心將欲折、征  
 人何得和、（郎振）

○秋樹忽春色、曉山皆暮色、（紅葉のそよ）  
 ○目、眼鏡遠く入歯、心も満ちけんと、川舟  
 ○変るも、細根大根、度小路、（日）  
 ○大に楊柳、緑煙糸、三馬煩、若折一枝、唯有春  
 風、最相惜、慇懃、更向手中吹、（唐楊巨源）  
 〇（一） 吹く名残や、惜しきあけの、手折し枝を  
 〇（一） 独情、幽苔、淵色生、上有黄鸝、高樹心

春潮帯雨晚来急野浦無人舟自横  
葦原村 瀬川西側  
○庭に花散る 豊作隠居 数寄屋の端に  
色白の丸目男一人

○此生世巧相逢 回首千般事 總非頼有明  
娥聊送瓦 毎因風景遠忘帰 布衣任為思際  
亮、金帯持忠 懐急花 從古豪雅多不良  
癡兒呆漢弄把杖、羅里

○日の本の丸くうみか付天か下こと曲りて

不二の大山 慈因院

○天り日の照さる四方の圓や 天の  
たぐいさるる山に 坐す山坐者行

○論語よみの書のおの海名をかき

○是言かすると論語りちくふん

○おらか大意か人と信あはいか

○和漢の書ちんばいもんくそんま

○大のそそくちんばいもんくそんま



○大三十日 需る平仄かあぬらう

○田又を四書文選のあいな後又

○文盲を奴をば埋めぬ始皇帝

○すかー底の消えやすきこと哀なるん、えいなき  
いと思ひきく

○獨住人間 乘市多口念佛 若心摩支

○美かぐんて若君の花の有りかたき 奥田抱生

○暑き日七草下る秋あうも花の散る

○重さうの尾をぬく秋の金遊ふ

○お代わらう一節を去りのおろ神さひぬ。

○や、抱へて乳の人探す踊らふ

○嫁入のけん衣に少たう踊らふ

○寒風振る柯、蒲條掩臥、暮産忽已過

我有霧菟愁、誓如抱沈病、起坐呼清尊、猶

飲之、獨飲、一斟解物累、再酌迴天和、教

觴竟復醺 高ち郎

○あか人と梅と箱に飲乾とん重立

○陰聲生雲類月木散清影天翻象緯通  
雲臥衣裳冷、欲是少宸鐘、令人皆深者、  
夫杜

○四山如睡臥却原、安、方知遠市、黄麦盡收  
分細徑、緑陰全滿、失紅村、鼓喉、蛙子野池、漲、搖  
尾、轉、火、性、香、象、吾、無、徒、行、思、尔、而、映、着、榴、火、酒  
帘、翻、香、頃

○儀狀とら男かはる酒の春 冊五

○宴あつて門鈴揺る、暁の光

○閑涼し舟と舟、夢うらむ

○金の世の名の世の修羅やとしの暮

○堂深しこの和方、化けたら

○留守に人かすめ、如の人を呼ぶ

○垣細や柳の花、鳴く馬の音

○おとこの出て去りぬ、梅柳さつ

○野の名の法隆寺とや安土城

野石

○凍心動かす一群の信天翁

○秋晴や馬山とく遠き廻をゆく

玉振

○秋風や鐘を鳴らゆ大銀杏 心あふゆ

○さく花のおぶをえんば鳥にむははるこころみん

思ひこりけり大隈さる

○行秋を尾花がささげく 乱一葉

○長安市上酒中仙 唯有伯倫堪比鄰 四海論

伴名利先生自是獨醒人

李白大醉 盤石

○才子不知義、美人不習疎、海内何以與、英雄泣

窮途、江島伝子

○古寺跡窓雪又爪、猿啼鬼嘯盡、轉世海

内多難日、將志深山出、今上

○死去元知萬事空、只恐不見九州同、王師北定中原

日、家祭無忘告乃翁 陸游

○夜弄梅花把酒稀、金瓶紅燵烘春衣、秦關三月

無消息、又在江南送、一悵、日上

○華表千年光鶴悲、神仙消息在誰知、行人無限  
帝鄉思、古木寒山画相祠 大年府

○返照移時入、倚窗、芙蓉楊柳滿秋江、漁童款乃  
蕩舟去、故亭起錦鳧飛一双

○冰肌玉骨、西無猜、又見南枝、吹竹、一豔苦心寄  
何家、如山、山下、鷓鴣飛未

○長歌園林黃鳥未、百花春酒後、以多、人生把酒聽

黃鳥、黃鳥、一醉、酒、一杯

○空谷出、幽崖、翠芳、素心、一箭、漏春光、搗末小朵  
簪蟬、紅紫、自是、凡、心、絕世、妝

○何人、靚、濕、紅、髮、踏、然、切、是、能、待、杏、滿、仙、一、斗  
万、局、天、水、試、帝、觴、餘、滙、尺、三、千、海門錄

○一、以、比、の、朝、の、実、味、や、春、七、高、去、及  
切、春、の、ま、ぐ、ろ、の、さ、く、み、味、を、し、深、介

酒、春、の、ま、ぐ、ろ、の、さ、く、み、味、を、し、品、川

才のばえの位をきつてはなけり  
 白魚の子持つてはなけり  
 あつせうと信篤見えし洗靴  
 白いもの誰かかゝる、鷄  
 すまゝにはまゝにおくさゝ  
 鶏汁とくく心ぬが氣味こり  
 つまみかきまゝとていこ  
 問男  
 問女

〇戸假交葉踏徑不受花深

〇無故而文者、則無故而辭

〇有梅添月色、無竹欠秋聲

〇天洞碎眠春、豈知行數難

〇芳蓮竹為隣、風動一度君子味

〇雨後洞山如、何如笑道樵柴多

〇春刈蒼蔬床、多少淡然香圃家兒

○風捲雲嵐、見大地山河三千世界

○お考無き人

○黄菊白菊その名の如く無くもかゝる 花言

○手短しと名に、なくの黄菊も サキ

○黄菊白菊、鮮くもその節句、不暮太

のみその名の菊をおき、大表の千代のかごしと

えおをそと 昭宣皇太后 萬寿一

○えなるの御旅、句かみし、の菊の上より

まの花とまき 同上

○菊の葉えり、葵の枯れ、西に清の音かす

○朝より、故人の毎にえり、不惠きぬ

に、急き身、えり、

○若道春風不解意、何因吹送、王曆

○殿見千門、若人、同上

○宮殿生秋景、君王恩幸、法

度金典 同上

○寂寞柴門人不到，空井獨共白雲期。同上

○野夫終三戶，送却少田鄰。波沙安石里，社  
藿數寒田神。同上

○江流天地外，山色有无中。却是涼前浦，波  
濤動遠空。同上

○行到水窮處，坐看雲起時。偶然值林叟，  
談笑無忘期。同上

○不知香積寺，數里入雲峰。古木無人逐，深

入何處鐘。同上

○思出宇宙外，曠心在寥廓。長風萬里來

江海揚煩惱。同上

○箇箇人心有仲尼，自將少見苦慈悲。王陽明

○天比之無匹，與王水魅山妖競偷取。公然又盜

山頭雲，去向人間作風雨。王陽明

○嶮夷原不滯胸中，何異浮雲過太空。夜靜海

濤三萬里，月明飛錫下天風。王陽明

○溪山安に地行、赤心是深名未易抛三條の  
 ○秋業後、舍似陶家、遍後離也、日漸斜、不是  
 花中偏、言、東、北、花、開、後、更、無、花、一、元、務  
 の菊、の、心、更、に、花、を、後、の、月、支、た  
 の、店、先、の、曇、ん、と、も、小、雨、曇、り、う、ら、う、 不、致  
 ○波、世、傳、の、英、氣、の、露、世、に、う、ら、う、 移、れ、る、玉、毛、の、心、  
比、海、の、心、 心、ま、か、い、る、く、ま、ど、り、七、さ、う、  
 ○夜、空、の、胡、世、に、う、ら、う、東、路、を、書、を、 幾、も、七、條、の、七、

西の海、四の石所をいふ。

○国、柔、是、由、在、沙、頃、 碧、眼、黄、髮、傾、醉、  
 行、會、 鼓、腹、鳴、く、歌、未、罷、 九、印、山、下、月、如、 空、山、  
 ○南、お、蜻、蛚、比、里、 龍、沙、流、山、徑、 海、雲、 中、石、 楠、  
 花、背、春、无、曉、 是、尉、初、 前、射、志、 遊、一、 度、遊、 ち、村、  
 ○幽、佛、川、雲、 入、頭、 踏、津、 野、月、 落、海、 如、雷、 鼓、七、 音、  
 歌、露、 群、胡、 碎、涼、 九、廟、 前、風、 雨、来、 頼、三、 村、三、 音、  
 ○来、年、来、今、 持、吾、 来、河、 沙、漫、 分、山、 崔、堂、 忠、主、 德、相、 顧、



志涉汪洋山無色天地哀最憐少婦追不及僵死化為  
一石塊此公壯烈死不已板身于島安在死直揮一鞭  
早龍攫取滿河堆武夫以多自今土人從沒有心各  
踰可推感未死待死送死只聽怒海吼百雷

○一解去石如一盤

○一馬不被而驚

○一身都是膽

○誰敢一枚泥

○少年上人雅懷素草書天下稱獨步墨池  
老去北溟息筆鋒殺盡中山兔八月九月天氣  
涼酒徒詞客酒易盡殘麻素絹排數箱宜  
少石硯墨色天玉研碎後何繩林須史掃盡  
數千張鄧鳳驥為奴奴為奴蒼天飛雪何處  
起未向空不傳手一行數字大如斗况如  
少神鬼為時只見龍龍左盤右磨如驚  
電狀回楚漢相攻敵湖南七郡凡武家

家一屏障書題遍，王逸少張伯英，古篆行浪  
得名，張顛老死不足數，我師此輩不師古。  
古來第了貴天生，何為安公好，大娘渾脫  
舞。

李白贈懷素草書歌

書評

似碑心夫人不恣狂，置奉止羞恣不似真。

如深山道士見人便欲退，猶

言勢雄強如龍跳，天門虎臥鳳閣。

骨氣洞連爽，如有神力

如雲鶴游天，羣鴨戲海

如項羽拔劍，樊噲排突，強力欲張，鐵柱特立，昂  
然有不可犯之色。

如快劍斫陣，強弩射千里，所當無敵。

如金剛瞋目，力士揮拳。

如羣羊食蛇，驚雷閃電。

如揮衣舞女，美容低昂。

如美女登臺、仙娥弄影、紅暈映水、碧玉浮霞、  
心新癖極、百種無畏、終無烈婦之態、  
如新瘡病人、顏色憔悴、舉動辛苦、

深山得道之士、修養已成、神氣清健、無一點俗塵、

○睥目隆準、顏塗丹、矮軀赤心、長身看  
其止端、重邱山安、才動、迅鵬、鷲、搏、音  
吐、旬、扣、金、盤、一呼、堪、息、百、天、謹、林野の  
因千誓  
劍後銘

○寒天如粉

○眉目豔皎月、一笑傾城歎

○北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人

國、寧不知傾城與傾國、佳人難雜、再得漢書

○大廈托坤容、在宛

○自楚之及、誰一の心の良薬かある、いかに

○如何にあり、くとも、古年より、大布望と、い

○孫、の、ま、る、の、全上

○意志の剣であらう鍛へん鍛くことと鍛くこと  
 ○良心の弱い者は他人の幸福を奪ふ力の強  
 いハ上  
 ○自分の自由意志に他人の約束を法律以上の  
 強くするけんか  
 ○一枕新寢夢不成碧紗如月光清曉未  
 轉是江風急乱落梧桐心而愁  
 ○銀庖香酥大夫翹却方之並美飲殿斗

酒を士精立孫子臣鬼田酌當書  
 ○八兵衛が破顔微笑や今年酒三茶  
 ○馬叱る新酒の酔いや酔冠子奴  
 ○池家言まし酒に頭のをを焼く  
 ○鬼母や新酒の中のをを焼く  
 ○酒を多めると喜ぶ  
 ○酔冠や花酒飲さん  
 ○七いりや酔冠子奴

○大わらわのこころの酔ひの酒に也  
 ○夏時や晚ことの柄杓ぬ  
 ○足あふり亭主に別れは酒に也  
 ○利来をセアと云ふまゝ酒に也  
 ○髪を焼くも糸糸と煮る夜酒淋し  
 ○今此角天地を移しつる彼  
 ○十五の酒を飲み出せ今日  
 ○酔ひを得て居るは這はす月也

○其の角の折ぬせぬ麻の嘆きうら  
又角の音の夫の死を悼む  
 ○カリくと竹かちりけりきりくす一葉  
 ○さうらうやいれかき破るまじりくす日  
 ○遠くゆけをあらに秋もあもあもびアモ  
アモ佛あもあも佛死一葉  
 ○まの雨夏又まに秋日なり廿日  
我も今も也  
 ○行為が寝ねる現空屋よりつて流るる娘めね

思ふべき行為であると思ふは良心の決定に互裁で  
論議するものがあるト云フ

○我々の生活は常に善あるべきものであるが陰謀  
のあつても何れも善いこと、善い陰謀が別である  
に於て、すべて社会公共の幸福のためを為さるゝこと  
いふことは、是れを善いことと云フトマス、モロー  
○中身の所有、傲慢と、残忍と、自惚の強い無智と  
耽溺を教へる、ロウイシエ

○大なる罪を犯すは、土地の貧乏や教育の乏  
乏を責むること、出来ぬト云フ

○人々の生活は、彼等が、いふと、思ふべきこと  
こと、は、善い、出来ぬ、いふ、こと、自分、の、事  
と云フ、いふ、こと、向う、を、笑、は、いふ、こと

○男は、いふ、こと、努力、の、事、女、は、似、た、男、と、同、く、不  
具、ある、こと、いふ、こと

○死、に、行、く、事、の、言、動、の、人、々、を、偉、大、な、力、を

How much with

How much with

持つともある、えんかたすく生きることに宜る重大の  
ある外んいも、よく死ぬこと、死と何ともまうて重大  
である。醜い程暇ひまの死、数々の影ゆきを弱  
め、よき程暇ひまの死、若くは生を償ひ  
ひらき、アミエ

○人の死の瞬間、生活の蜉蝣、彼がまうた、懊  
悩と偽瞞と悲々と悪、油を以て書を讀んで来た  
蜉蝣は、いつともうずつとぬい光を放つ、今ま

謝の中にあつた、まこと彼がだん照らして、や  
がてりし書とまて、嗚るも、まこと、永えん  
えん、口上

○真に偉大なる事業、まこと、陰々の目に、見えぬ安  
みとつて、達成さん、セネカ

○こき行く日々を、美多美のうを、飾り、ニイキエ  
の自由を、否定する者、色彩を、否定する、盲人の  
やうなものだ、彼等、人間が自由、ひまの領域

Amo, amo, amo

Amo, amo, amo

と知らずのこゝろ。トルストイ

○老か行いと見習へ。誰んまの古さの薄さやうに行  
為せよと

○少何をも云ふ偽をも、其方のいふより他のを偽と捏  
造せること無しに、主法出るといふことツスインダ

○達法、列る道に無教あるべからず、其に列るるは  
一筋のルツツス

○吾々は満ちて深淵に向つて突進する。その深淵

を見らぬやうに愚故物も前へ突き出してくる。こゝろ

○人のこの世を生かす時を握るのみならず、全世界の

私のものであるとめ言するかの如くあるが、この世を去

る時々の世を離れて行く。抑然とせよ、何も持た

ず行かぬのか」とそのあかのやうに猶太人

○聖人に向つて貴方が悪人と考へてゐるのうへ、人

が言つた。すると聖人の答へて言つた。彼等が私

をいひ出すへを知らずあるのうへ、まじくといふ難者

無名

七



いせもなるうらみは、彼がいのちよせつと手紙に  
と云つたにあらう

○海の内体、美し善悪の文法をも都令の海、  
海の内体、美し善悪の文法をも都令の海、  
セイブ、ムルウ

○石がわにせのんさりてげ洗つ候のあついで、  
えい、雨次天を御を

○おちあことつらぬきすて、くにたのうらむすめさ  
と書きたる

